

Title	福澤先生とロンドン
Sub Title	Fukuzawa Yukichi and his London
Author	高宮, 利行(Takamiya, Toshiyuki)
Publisher	慶應義塾大学アート・センター
Publication year	2009
Jtitle	Booklet Vol.17, (2009.) ,p.121- 125
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	FUKUZAWA Yukichi 3
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11893297-00000017-0121

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

福澤先生とロンドン

高宮 利行

福澤諭吉先生（以下福澤と略す）が、明治維新前から西欧の文物や制度を積極的にわが国に取り入れ、必要に応じて、多くの西欧の観念や語を日本語に置き換えたことはよく知られている。書物を通じてはもちろん、西欧文明を直接肌で吸収せんと志して、30歳前に出かけたアメリカや欧州への旅で福澤が得たものは、物理的にも精神的にも大きかったことに疑いない。これらの足跡については、福澤が旅行中に書きとめた「西航手帳」★¹や『福翁自伝』★²、『西航記』★³などで明らかにされており、より客観的には山口一夫氏の著作『福澤諭吉の西航巡歴』★⁴、『福澤諭吉の亜欧見聞』★⁵や、部分的には福澤が視察したロンドンの医療現場を調査した山内慶太氏の優れた論文「福澤諭吉の見たロンドンの医療」★⁶などで詳しく明らかにされてきた。

渡欧の3年前に蘭学から英学へ転じた福澤は、1862年の文久遣欧使節団の一員として、特にイギリス社会や諸制度の現状を見ることに大いなる期待をかけていた。時はヴィクトリア女王が率いて世界の経済政治に君臨した大英帝国が絶頂期にさしかかった時期であった。いわゆるヴィクトリア朝（1837-1901）の中期に当たるこの頃、西欧列強の中でいち早く産業革命に成功したイギリスは、植民地から供給される安い労働力を背景に産業資本主義を大規模に推し進め、ナポレオン戦争などの後遺症で疲弊した欧州各国に廉価な工業製品を輸出して巨額の富を築いていった。

一方、鉄道網の拡張や海外進出で得られた経済繁栄とは裏腹に、都市への人口流入、都市のスラム化と生活環境の悪化、若年労働者に強いられた長時間で過酷な工場労働など負の遺産が蓄積されて行った時代でもあった。搾取る資本家と搾取される労働者が対立する構図は、機械を用いて廉価だが粗悪な工業製品を大量生産する方式に反対して、農本主義、家父長主義、「手と魂」で生産していた過去への回帰を切望する中世主義を生んだ。この種の研究の元祖とも言えるアリス・チャンドラーは、『中世を夢みた人々——イギリス中世主義の系譜』★⁷で、19世紀イギリスの中世主

義者として、力点はそれぞれ異なるものの、ウォルター・スコット、ウィリアム・コベット、湖水派詩人、トマス・カーライル、ベンジャミン・ディズレイリ、ジョン・ラスキン、ウィリアム・モリスらを挙げている。サミュエル・スマイルズの『西国立志篇』★⁸やジョン・スチュアート・ミルの功利主義などとは相容れぬ「後ろ向きの」中世主義は、おそらく福澤の思想とは相容れぬものだった。

1862年当時、イギリスやヨーロッパは確実に近代から現代へと変化する兆しが見られた。書物の社会史を標榜するアナール派のひそみに倣って、私はその分岐点を福澤西航の3年前、1859年に置きたい。この年、生物学者チャールズ・ダーウィンの『種の起源』★⁹が出版された。生物は神の恩寵によってではなく、環境に順応できる形で進化していくことを主張した本書は、著者の思惑とは別に、必然的に既に起こっていた宗教、とりわけキリスト教への懐疑傾向を深める結果となった。

ロンドンにいた哲学者カール・マルクスの『資本論』★¹⁰の前身『経済学批判』★¹¹もこの年に出た。彼は、資本主義を分析して、新たに普遍的な歴史観として唯物史観を樹立し、資本主義社会は社会主義革命により終焉し、社会主義段階を経て階級のないユートピアたる共産主義社会が到来する必然性を説いた。この思想の現代社会への影響力は、20世紀の国際政治の動きを見れば一目瞭然であろう。

音楽芸術の領域に目を転じれば、作曲家リヒャルト・ワーグナーの楽劇『トリスタンとイゾルデ』が生み出されたのも1859年であった。伝統的な作曲技法から半音音階へ、そして無調音楽、12音技法に結びつく現代音楽への橋渡しをしたのが、この作品である。その前奏曲と「イゾルデの愛の死」を聞いても、これが1859年の作品とは信じられないほどの現代性が秘められている。これら3作品はいずれも現代の科学と宗教、経済と政治、そして音楽を考える際、無視できない重要性をもつ。もちろん一般の社会では、この時期が現代の初めではなく、近代の終わりだったともいえようが、しかし多方面で現代の芽が静かに息づいていたのである。そして福澤もそのことを認知していたかもしれない。

福澤がロンドンを訪れたころ、イギリス中の人々がダーウィンの進化論について噂していたことは、当時のイギリス社会を舞台にしたジョン・ファウルズの小説『フランス軍中尉の女』★¹²と、ハロルド・ピンターの脚本によるその映画化(1981)によってよく分かる。本書はヴィクトリア朝社会の光と影を巧みに描き出した一大研究書でもあった。フランス軍中尉に捨てられた(とされる)女主人公サラは、精神を病んでおり、町医者は彼女の症状からうつ病(メランコリア)と診断する。このサラに、ダーウィン信奉者のジェントルマンが、実業家令嬢との婚約を破棄してまで夢中になるのである。

まだ精神分析学が存在しなかったこの時代にあって、精神病患者をいかに扱うかはイギリスでも、また日本でも、大きな社会問題であった。福澤

がロンドンで訪れたいいくつかの病院医療の現場のひとつがベツレム精神病院であったことは、山口・山内両氏の調査で明らかとなっている。特に山内氏は、同病院に残された訪問者名簿に福澤の署名を確認している。福澤は『西航記』や『西洋事情』^{★13}の中で、イギリス最古の精神病院で当時改善された施設に関して詳述している。もちろんイギリス人関係者からの助言もあっただろうが、単なる社会施設の見学に終わらせることなく、よい点を日本社会に持ち帰りたいとメモを取りながら視察する福澤の熱心さは、特筆に価しよう。

さらに山内氏は、そこを訪問した福澤が面会した3人の患者に関して、診療録を仔細に検討することによって特定することに成功した。その一人が、統合失調症（精神分裂病）から妄想に駆られて父親を殺した画家リチャード・ダッド（1817-86）であったというのはきわめて興味深い。彼はヴィクトリア朝の妖精画家の中でも、好んで閉所恐怖症的な絵を描く異色の画家だった。なおダッドの精神病院生活については、サイモン・ウィンチェスター著『博士と狂人——世界最高の辞書OEDの誕生秘話』^{★14}でも触れられている。

ケンブリッジ大学のアラン・マクファーレン教授は、福澤を近代世界を作り上げた6大思想家の一人として取り上げた人類学者である。著者が3度にわたって個人的に面談した際、教授はわが国におけるジェントルマン・クラブの嚆矢といえる交詢社の創設を、きわめて高く評価していた。クラブといえば、ナイトクラブかゴルフクラブを思い出す向きもあるだろうが、18世紀イギリスに生まれたジェントルマン・クラブGentlemen's Clubは、ロンドン社会の中核を担うインテリが階層、職業、年齢を問わず、飲食をともしながら談論風発に興ずるという趣向で作られた会員制組織である。クラブによっては、現在でも名刺の交換をしない、初対面のゲストでも握手をしない、仕事の話はしない、といった決まりをもつところも多い。おそらくこの伝統は、中世以来イギリスの最高学府であるオクスフォード、ケンブリッジのダイニング・ホールや談話室（コモン・ルームあるいはコンピネーション・ルーム）の習慣に由来するのだろう。例えば、戦前のケンブリッジ大学セント・ジョンズ・コレッジでは、ダイニング・ホールで食事の学生が政治、宗教、異性、金儲けについて話題にすることを禁じていたという。だからイギリス人は会う人ごとに天気を話題にするのだと悪口が聞こえてきそうだが、実際ロンドンにはオクスフォード・ケンブリッジ・クラブがあり、両大学の卒業生が入会できる。映画『私家版』（1997）にも一場面として用いられている。

わが国のように、長い間にわたって縦社会のヒエラルキー意識が強かった社会では、交詢社のような多様な出身、職種、階層の人物が会員制のクラブで語り合うという機会もなかった。「知識を交換し、世務を諮詢する」社交の機会を作るべく、1880年に福澤が主唱して銀座に設立された交詢社は、この点でユニークだった。福澤自身は1860年5月に、サンフラン

シスコのユニオン・クラブを訪れている。また「西航手帳」にはロンドン滞在中に‘The Conservative Club/1200 Gentlemen’と書き残した一行がある。現在もアセニウム、トラペラーズなどジェントルマン・クラブがひしめき合うセント・ジェームズ街の、74番地にあるこの保守党クラブを訪れたのではないかと考えられている。『写真集よみがえるロンドン——100年前の風景』^{★15}には、1840年に建造されたこの建物の外観写真がある。福澤がこういった体験を通してクラブの精神に触れ、わが国にも取り入れた功績は大きい。

西欧文明に慣れ親しんでいる現代の日本人でも、こういった豪壮な概観と瀟洒な内装を誇るクラブに入ると、気後れするものである。長くロンドンに住んで漱石記念館を営む恒松郁生館長は、英国体験の少ない日本人客をロンドンのクラブに招待するのを躊躇するという。一般の日本人には、他のメンバーやゲストと打ち解けるための習慣やプロトコルに欠けているからである。明治以前の日本社会からやってきた福澤は、西欧での体験を「サア分らない」ことばかりだと述懐しているが、一方でジェントルマン・クラブに触れて、そのよさを積極的に交詢社設立に取り入れたわけだ。そのタフさに脱帽だ。

マクファーレン教授は日本の他大学でもしばしば教鞭をとった学者であるが、専門の異なる研究者が集まって話し込むコモン・ルームのような部屋を見たことがないと言った。それだけに福澤が主唱した交詢社に、イギリス的な精神を見いだしたのかもしれない。

註

- ☆1 — 『福翁自傳 全』福澤諭吉口述、矢野由次郎速記、時事新報社、1899年。
- ☆2 — 福沢諭吉『西航手帳』[福沢諭吉協会]、[1984]年。
- ☆3 — 福澤諭吉『西航記』、『福沢諭吉選集』第1巻、富田正文・土橋俊一編集、岩波書店、1980年。
- ☆4 — 山口一夫『福澤諭吉の西航巡歴』、福澤諭吉協会、1980年。
- ☆5 — 山口一夫『福澤諭吉の亜欧見聞』、福澤諭吉協会、1992年。
- ☆6 — 山内慶太「〈土曜セミナー講演〉福澤諭吉の見たロンドンの医療」、『福澤諭吉年鑑』Vol. 29、2002年12月、105-129頁。
- ☆7 — CHANDLER, Alice, *A dream of order: the medieval ideal in nineteenth-century English literature*, Lincoln: University of Nebraska Press, [1970] (アリス・チャンドラー『中世を夢みた人々——イギリス中世主義の系譜』高宮利行監訳、研究社、1994年)。
- ☆8 — SMILES, Samuel, *Self-help, with illustrations of character and conduct*, London: J. Murray, 1859.
- ☆9 — DARWIN, Charles, *On the origin of the species by means of natural selection, or, The preservation of favoured races in the struggle for life*, London: John Murray, 1859.
- ☆10 — KARL, Marx, *Das Kapital: Kritik der Politischen Ökonomie*, Hamburg: O. Meissner, 1867-1894.
- ☆11 — KARL, Marx, *Zur Kritik der Politischen Ökonomie*, Berlin: Duncker, 1859.

- ☆12 — FOWLES, John, *The French lieutenant's woman*, London: Cape, 1969.
- ☆13 — 福澤諭吉『西洋事情』尚古堂、1866-1870年。
- ☆14 — WINCHESTER, Simon, *The professor and the madman: a tale of murder, insanity, and the making of the Oxford English dictionary*, New York: Harper Perennial, 1999 (サイモン・ウィンチェスター『博士と狂人——世界最高の辞書OEDの誕生秘話』鈴木主税訳、早川書房、1999年)。
- ☆15 — ジョージ・H・バーチ『写真集よみがえるロンドン——100年前の風景』出口保夫編訳、柏書房、2005年。

(たかみや としゆき・慶應義塾大学文学部教授／中世英文学)